Architectural Institute of Japan

【カテゴリーⅠ】

日本建築学会計画系論文集　第608号，173-179，2006年10月
J. Archit. Plann., AIJ, No. 608, 173-179, Oct., 2006

現代日本住宅の創作における与条件と建築の関係イメージ

建築家の言説にみられる空間的思考に関する研究

RELATIONAL CONCEPTIONS BETWEEN PROGRAMS AND ARCHITECTURE IN DESIGN CONCEPTION OF JAPANESE CONTEMPORARY HOUSES

Study on spatial conceptions of architects in the articles

佐々木 夕介*，山田　深**
Yusuke SASAKI and Shin YAMADA

By studying articles written by contemporary architects, published in "Shinkenchiku" and "Shinkenchiku, Jutaku-Tokushu" from 1970 to 1999, this report aims to illustrate how architects have related architectural programs, such as requirements for building and concerns of architects, to architecture. At first, the contents of these architectural programs were studied and were categorized into three different groups: Human, Building and Surroundings. Then the relations between these programs and architectural practices were analyzed with the KJ method. Their relations were abstracted into two different levels: the level of the Form of Relation and the level of the Intermediary of Relation. Finally, with this report we clarified various relations between architectural programs and architecture, and studied spatial conceptions by architects of those relations.

***Keywords :** Contemporary Japanese Architects, Architectural Program, Spatial Conception, KJ method*
現代日本建築家、与条件、空間的思考、KJ法

1. 序　：研究の目的と概要

一般に建築の創作には様々な事柄が関わる。住み手の生活様式や建築法規、敷地環境などの設計の前提条件や、建築家の主題・関心のもとに参照される伝統様式や都市イメージなど、設計に関わる多くの事柄は建築家によって建築の与条件[注1)]として認識される。近年、建築を取り巻く環境が時代と共に複雑化する状況において建築家は、例えば、住宅の配置構成を住宅地に固有の外的要因と関連づけたり、生活様式の変化に伴う様々な住み手の要求に対応するなど、与条件に対する多様な解釈に、建築の表現の可能性を見いだしているともいえる。また、建築家は創作行為において、様々な水準の異なる与条件を建築の具体的な操作手法と関与させながら整理することで、実体としての建築を構築している。つまり建築の与条件とは、単なる事象としてではなく、建築の操作手法との関わりにおいて初めて具体的に捉えられるものであり、その認識には人間の生活や外部環境などに対する建築家の空間的思考が現れているといえる。

こうしたことから、建築の与条件と実体としての建築の関係についての分析検討は、建築家の創作にみられる空間的な概念や思考のひろがりを知る上で重要であると考え、本論では、現代日本の住宅作品に付された建築家の言説[注2)]を手がかりとし、建築家が具体的な設計行為に際して与条件と建築との関係をどのように構想しているか、その思考の枠組の一端を明らかにすることを目的とする。建築と与条件に関する既往研究として、設計意図や表現手法と環境要素との関連性を分析したもの[1)]や、建築家による生活の空間的認識に関する研究[2)]などが挙げられるが、これらがいずれも限定された与条件についての報告であるのに対し、本研究は様々な与条件と建築の操作手法との関係について総体的・相対的に分析検討しており、単にそれらの因果関係を求めるのではなく、分析を通して建築家の空間的認識に関する新たな知見を求めることを目的のひとつとしている[注3)]。

本論の概要を示すと、まず資料[注4)]とした言説から、建築家が創作において構想（イメージ）した与条件と建築の操作手法との関係が明確に語られている部分を読み取り、それらを関係イメージとして定義・抽出した（表1）。例えば、表1の抽出例 004-2 では[注5)]「傾斜地であるため、それを利用することにした。敷地のレベルは基本的に尊重し、床高はそれに合わせて決め」という部分から、敷地の傾斜を与条件とし、建築はその傾斜を利用した内部構成とする、という関係イメージを読み取ることができる。以上の方法で全資料を分析したところ、145 の作品解説から 295 の与条件と 250 の関係イメージが抽出された[注6)]。それらを分析対象として、まず2章では与条件の内容を分類整理し、全体を【人間】【建築】【環境】[注7)]という3つ

* 室蘭工業大学大学院　博士後期課程・工修　Graduate Student, Muroran Institute of Technology, M. Eng.
** 室蘭工業大学建設システム工学科　講師・工修　Assist. Prof., Dept. of Civil Engineering and Architecture, Faculty of Engineering, Muroran Institute of Technology, M. Eng.

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

のまとまりで捉えた。次に3章では、関係イメージの示す内容をKJ法[注8]に基づいて分析検討し、与条件と建築の具体的な関係のあり方を示す〔関係形式〕と、それらの関係の媒介となる概念を示す〔媒介性〕という2つの異なる水準での枠組といくつかのカテゴリーで全体を捉えた。最後に結論として、与条件の内容と関係イメージの対応関係をみることで、通時的傾向や与条件に対する建築家の空間的認識について考察している。

2. 与条件　：創作に関わる与条件の内容

本章では、設計に関わる諸条件や建築家の関心に基づいて参照される事柄を、建築の創作における与条件と定義し、資料からその内容を読み取り分類整理した（表2）。その結果、与条件全体は【人間】【建築】【環境】という3つの大枠と15のカテゴリーで整理され、さらに1970~1999年での通時的傾向がみられた。

2.1. 与条件の内容　：【人間】【建築】【環境】

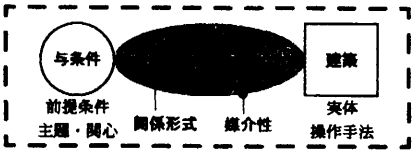
【人間】には、建築において営まれる人間の生活や行為などを表す与条件がまとめられ、なかでも“生活”は最も多く、「生活像」など生活を全体的に捉えたものや、「アトリエ」「収納」などの具体的な用途を示すもの、「家族構成の変化」など生活における変化がまとめられた。そのほか「家族間のつながり」などの“人間関係”、「動き」「運動」などの“身体”、「生と死」「人間の根源」などの“精神性”、「コスト」「予算」などの“経済”が【人間】として分類された。

【建築】は、既存建物や周辺環境の部分的要素や建築の性能などを与条件とするもので、“建物”が最も多く、「日本の伝統屋根」「nLDK」などの伝統的・慣習的な建築様式や、「家という概念」などのイメージ、「積木」などの造形物がみられた。そのほか「工場生産物」などの“素材”、「採光」「通風」「遮音」などの“内部環境”がみられた。

【環境】は、建築に関わる様々な物理的・制度的環境を与条件とするもので、「建蔽率」などの“法規”、「傾斜地」「狭小地」など敷地の特徴を表す“敷地”、「道路」「隣家」などの隣接要素に着目する“隣接”、「住宅地」「街並み」など周囲の様子や環境を示す“周辺”、「過酷な都市状況」「都市という地形」など、都市環境のイメージや状況を捉える“都市”、「富士山」「雨や風、太陽」「夏の暑さ」など外部の対象物や気候環境を扱う“自然”、「宇宙的秩序」など観念的な外部を表す“外部性”がみられた。

2.2. 与条件の内容の通時的傾向

建築に関わる与条件をその内容に即して分類したところ、各年代ごとにそれぞれ特徴がみられた（表2・図1）。まず資料全体



関係イメージ＝建築家が構想する与条件と建築の関係

No.004　遠藤邸の空間 / 木村誠之助

「この住宅では幸い傾斜地であるため、それを利用することにした。敷地のレベルは基本的に尊重し、床高をそれに合わせて決め、天井面は平面的広がりを感じさせるようにできるだけ一定とした」(004-2)

与条件　→【環境】“敷地”
関係イメージ　→〔関係形式〕:《物体》－〈適合〉
〔媒介性〕　:【構成】

No.045　解説－小松邸解読の手引き / 黒川雅之

「この建築は先に箱型を設定し、それを切り取ることからつくられはじめた…箱は建築の原型であり、民家の表象である」(045-1)

与条件　→【建築】“建物”
関係イメージ　→〔関係形式〕:《表象》
〔媒介性〕　:【意味】

No.	掲載年月	論文名	建築家
001	7002	デザイン以前のデザイン　その1	宮脇檀
002	7002	環境装置としての形態	内井昭蔵
003	7006	柔間と充間の周辺	鈴木恂
004	7009	遠藤邸の空間	木村誠之助
005	7101	作家と住み手のすき間	宮脇檀
006	7101	象徴空間を超えて	篠原一男
007	7110	プライマリーアーキテクチュアとしてのブルーボックスハウス	宮脇檀
008	7110	建築としての住宅	坂本一成
009	7110	設計行為とは歪められていく自己の思考過程を追跡する作業に他ならない	伊東豊雄
010	7202	累辻邸設計メモ	東孝光ほか
011	7202	形態との闘い	斎藤義
012	7208	作住記	宮脇檀
013	7208	無明の思惟	相田武文
014	7209	建築とその外界について	原広司
015	7402	〈サイコロの主題による家〉12のメモ	相田武文
016	7408	「ひとつの仮説」	東孝光
017	7408	土間への系譜	武者英二
018	7502	生の意味の視覚化	荒木正彦
019	7506	幻庵録	石山修武
020	7507	現代日本のリージョナリズムへのひとつの解答として	石井和紘
021	7508	黒の回帰	伊東豊雄
022	7510	視形の空間を横断するとき	篠原一男
023	7602	沈黙について	相田武文
024	7602	普通の建築	出江寛
025	7602	日本型住宅プロトタイプの提案	山下和正
026	7605	像と地	谷口吉生
027	7608	光幻楽	黒川哲郎
028	7611	白い環	伊東豊雄
029	7611	〈具体〉そして関係へ	坂本一成
030	7702	住居思考	武者英二
031	7702	状況に模す	安藤忠雄
032	7702	防御の季節に	宮脇檀
033	7705	高橋たか子の建夢術	黒川紀章
034	7706	文脈を求めて	伊東豊雄
035	7708	細胞としての住宅	山下司
036	7711	町屋の一典型を目指して	石井和紘
037	7711	作水記	西野善介
038	7802	〈領型〉	安藤忠雄
039	7802	囲まれた空間への希求	波多江健郎
040	7808	家づくりの記	真喜志好一
041	7902	門のない都市	山本理顕
042	7902	家型を思い、求めて	坂本一成
043	7908	パラック物質論	fromnow
044	7908	作住記　#2	宮脇檀
045	7910	解説　－小松邸解読の手引き	黒川雅之
046	7910	正面性について	土岐新
047	7910	異形の違遇について	早川邦彦
048	8008	緩切設計ほのぼの住宅	石井和紘
049	8008	鎮の間　10のメッセージ	毛綱毅曠
050	8008	表現について	山下和正
051	8008	対空間の家について	斎藤義
052	8102	設計メモ	村上徹
053	8102	折衷維感	神谷五男
054	8104	住宅における「はり」	出江寛
055	8104	光格子の家	葉祥栄
056	8106	住宅という建築の〈家〉化	坂本一成
057	8108	遊戯性から	相田武文
058	8202	ネガティブプランとしての外部空間	林雅子
059	8202	〈都市の感受性〉	早川邦彦
060	8204	「いき」のための建築	若林廣幸
061	8204	生活様式の転換を設計のモーメントとして	永田祐三
062	8204	原型的枠組みについて	超後島研一
063	8204	置き忘れてきたモノたちへ	石山修武
064	8204	ひっぱり幻想	石山修武
065	8307	住吉の長屋から九条の町屋へ	安藤忠雄
066	8402	表現の回路	早川邦彦
067	8406	ひとつのエグザンプルとして	小宮山昭
068	85spr	遊戯性、積木、そして……	相田武文
069	85spr	〈反ブルネレスキ〉	石井和紘
070	85aut	イメージの回路	木村丈夫
071	85aut	表現について	山本理顕
072	8605	建築からのフォノグラム	鈴木了二
073	8606	空間・骨組み・皮膜	黒川哲郎
074	8609	都市という地形	山本理顕
075	8609	都市生活者のふたつの夢	鈴田善彦
076	8609	住宅は虚構か	北川原温
077	8612	対峙する力を生み出す場、素材、かたち	齋藤裕
078	8705	私様式	阿部勤
079	8705	設計という名のドラマ	田辺芳生
080	8706	地球庵神原的メモ	渡辺豊和
081	8707	輝ける廃墟へ向けて	北村陸夫
082	8711	森の輸送	原広司
083	8803	晶竹舎の空間構成と架構	橋本文隆
084	8809	カゲキな施主と優しい建築家	石山修武
085	8810	展開する建築	長谷川逸子
086	8901	抽象と応答	赤坂嘉顕
087	8901	“街の目”から住宅を見る	早川邦彦
088	8904	クラウン・ハットへのイメージアクセス	彦坂裕
089	8907	存在のある聖	竹原義二
090	8908	町並み景観と拠点地区の整備をつなぐもの	林寛治
091	8908	箱であって、箱でない空間を作る	木村誠之助
092	8910	住宅の文脈	富永譲
093	8910	自己相似集合の家	大野秀敏
094	8911	家をめぐって	入江敬一
095	8911	傾斜地に赴いて	濱口オサミ
096	8912	装飾の断面　－装冠の建築について	久保清一
097	9001	住宅設計の今	宮脇檀
098	9002	自然・素材・建築	竹原義二
099	9003	ボディ・センスとルーム・センス	前田忠直
100	9008	家・生活の舞台	古谷誠章
101	9012	“空・気”をつくる	林寛次郎
102	9103	ゲニウス・ロキによって	横河健
103	9105	「乱雪の家」建設の記録	小川行夫
104	9108	切断の余白に	竹山聖
105	9112	日暮里の町屋1990に関するノート	富永譲
106	9202	もうひとつのガラスの家・海と空の間	葉祥栄
107	9205	100平米のオープンプランの試み	石上申八郎
108	9206	屋上庭園の夢	岸和郎
109	9212	防御型都市住居の一典型	渡辺武信
110	9301	制度が現れる舞台	鈴木隆之
111	9304	〈透明性〉	富永譲
112	9307	SCREEN AND REFLECTION	竹山聖
113	9311	平田邸の空間	椎名英三
114	9401	住居No.14 筑波・黒の家　雑記	内藤廣
115	9402	「かたち」をすく	林寛治
116	9405	[Barn]について	吉本剛
117	9407	北で憶うこと、南で想うこと	上野武ほか
118	9410	空中の路地裏／斜めの縁側	小泉雅生
119	9412	未知の近代建築へ向けて	岡河貢
120	9501	近代住宅、あるいは夢からの覚醒	岸和郎
121	9503	複合世代住居	小野正弘
122	9504	つなぎ止めた時間	内藤廣
123	9506	浮遊する断片がダンスを始めた	竹山聖
124	9508	立体最小限住居　再考	難波和彦
125	9510	住宅の中の恒久的なものを拠り所として	木下道郎
126	9511	家族の希薄な共存性	安井雅裕
127	9511	仏教建築と木造モダニズム	内田祥二
128	9601	「そこの場所」としての住宅	高橋真
129	9603	静かな物体、またはテトリスのほうへ	石上申八郎
130	9603	時の箱　建築のフィールドから	川口とし子
131	9604	自然に帰す	阿部勤
132	9607	越屋根とソーラーセル	加藤義夫
133	9610	木とカーテンウォールの家	押野見邦英
134	9612	現代住宅のもちうるいくつかの生産的テーマについて	彦坂裕
135	9703	新しい住宅の公共性	伊東豊雄
136	9705	住宅における建築性	板屋リョク
137	9712	ふたつの亀裂がつくる明と暗のバイブレーション	平倉直子
138	9801	水	前田則貞
139	9803	生活を支える道具	北山恒
140	9806	庭のない家々	佐藤光彦
141	9902	小住宅における場所性	板屋リョク
142	9904	ぼやけた像としての生活	長田直之
143	9906	具体的な感覚	東雅男
144	9908	仮説を内蔵する住宅	北山恒
145	9911	アウタールームの天井は青い空	椎名英三

表1　関係イメージ抽出例・資料リスト

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

表2　与条件の内容分類（%）

与条件 / 年代	【人間】	【建築】	【環境】	【人間】					【建築】			【環境】						
				生活	人間関係	身体	精神	経済	建物	素材	内部環境	法規	敷地	隣接	周辺	都市	自然	外部性
70-79	33.3 (29)	20.7 (18)	46.0 (40)	20.7 (18)	5.8 (5)	1.2 (1)	2.3 (2)	3.4 (3)	6.9 (6)	4.6 (4)	9.2 (8)	2.3 (2)	9.2 (8)	2.3 (2)	10.3 (9)	8.0 (7)	9.2 (8)	4.6 (4)
80-89	21.9 (19)	28.7 (25)	49.4 (43)	16.1 (14)	2.3 (2)	2.3 (2)	1.1 (1)	0.0 (0)	19.5 (17)	5.7 (5)	3.5 (3)	3.5 (3)	4.6 (4)	3.5 (3)	8.0 (7)	6.9 (6)	23.0 (20)	0.0 (0)
90-99	43.0 (52)	18.2 (22)	38.8 (47)	24.0 (29)	11.6 (14)	1.7 (2)	1.7 (2)	4.1 (5)	4.9 (6)	3.3 (4)	9.9 (12)	2.5 (3)	4.9 (6)	6.6 (8)	4.1 (5)	1.7 (2)	18.2 (22)	0.8 (1)
70-99	33.9 (100)	22.0 (65)	44.1 (130)	20.7 (61)	7.1 (21)	1.7 (5)	1.7 (5)	2.7 (8)	9.8 (29)	4.4 (13)	7.8 (23)	2.7 (8)	6.1 (18)	4.4 (13)	7.1 (21)	5.1 (15)	17.0 (50)	1.7 (5)

表2註：各項目の数字は各年代における全体に対するそれぞれのカテゴリーの割合を、括弧内の数字はサンプル数を示している。また、灰色部はそれぞれ特徴のみられた部分を示している。

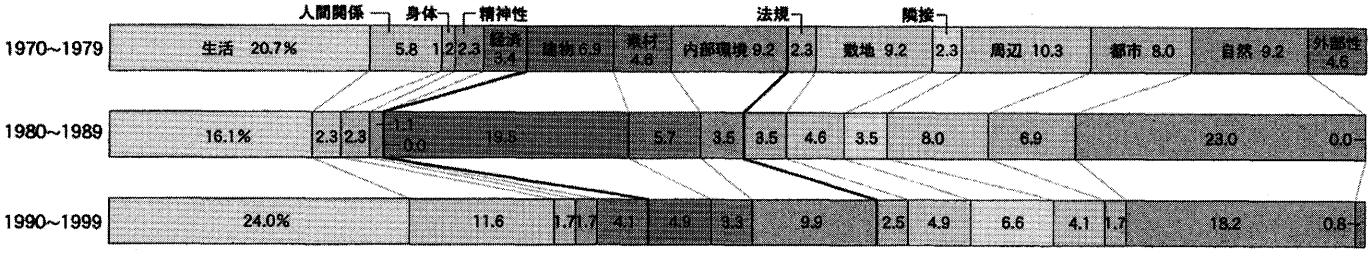


図1　与条件の内容の割合（%）　図1註：図1は表2をグラフ化したものである。太線は【人間】【建築】【環境】の分類を表している。

(1970~1999年)をみると【人間】－"生活"と【環境】－"自然"が多いことから、この2つは建築の創作における主要な与条件であるといえる。次に各年代をみると、70,80年代[注9]は共に【環境】の割合が最も高いのに対し、90年代は【人間】の割合が最も高く、家族関係や用途などの生活条件への着目が増加している。さらに詳細な内容をみると、まず【人間】－"生活"は各年代で多くみられるが、70,80年代は「生活像」など生活全体を抽象的に捉えたものが多いのに対し、90年代は「生活の変化」「コミュニケーション」などの具体的な内容が多く挙げられる。「家族間のつながり」などの"人間関係"も90年代に多く、建築の創作における人間生活に対する認識は、抽象的・観念的なものから具体的・現実的なものへと通時的に推移しているといえる。また【建築】－"建物"は80年代に多く、「土間・縁側・濡れ縁」「モンドリアン格子」など伝統的な建築要素などの参照が目立つ。【環境】では"周辺""都市""外部性"などが70年代に多く、住宅地や都市などの人工的環境への着目や、外部を抽象的に捉える与条件が多くみられるのに対し、80,90年代では"自然"が多く、主に自然景観や気候環境を与条件とする傾向にある。

3.　関係イメージ　：与条件と建築の関係

前章では、建築の創作における与条件の内容を分類整理し、各年代の特徴や通時的な傾向をみた。本章では、建築家がそれらの与条件と建築との関係をどのように構想しているか明らかにするため、抽出した関係イメージの内容をKJ法に基づいて整理した（図2・表3）。その結果全体は、与条件と建築の具体的な関係のあり方を示す〔関係形式〕と、それらの関係の媒介となる概念を示す〔媒介性〕という2つの水準で捉えられた。これらはそれぞれ関係の形式性・媒介性という異なる2つの水準で関係イメージを捉えたものであり、この分析を通して、建築と与条件の関係のあり方や与条件の認識に関する建築家の思考の枠組について検討することが、本論の中心的内容である。

3.1.〔関係形式〕　：与条件と建築の関係のあり方

まず、建築家が与条件と実体としての建築をどのように関連づけているかという観点から各関係イメージの内容を整理し、与条件と建築の関係を内部と外部の領域間の関係として捉える《領域》、具体的な形をもつ構築物としての建築と与条件との関わり方を示す《物体》、要求される使用条件と建築の関係を示す《機能》、与条件に内在する意味やイメージを建築によって表現する《表象》という4つの〔関係形式〕で全体を捉えた。以下でその具体的な内容をみる。

3.1.1.《領域》－〈連続〉・〈防御〉

《領域》は、建築と与条件との関係が内部と外部の関係として構想されるものであり、「この緩衝地帯を通して、四方の自然に対して広がりのある内部空間をつくりたかった」(114-2)のように内部と外部を視覚的・空間的につなぐものをはじめ、採光や通風のために外部を取り込む、自然現象を内部に映し出すなど、領域間を連続的な関係におく〈連続〉と、それとは対比的に「過酷な都市状況から個人の住処を擁護するため、開口部を持たない厚い壁によって閉ざされたこの領域を確立しよう」(031-1)のように、都市や周辺環境、気候などの外部の影響から内部を守る〈防御〉、さらに、数は少ないがそれら2つの関係を同時に示す〈連続＋防御〉というまとまりで全体を捉えた。

3.1.2.《物体》－〈適合〉・〈対立〉

《物体》は、物理的・制度的な環境に対してどのような関わりをもった構築物として建築を成立させるか、あるいは、既存建物や景観の形状をいかに参照するかなど、建築を具体的な形をもつ物体として捉えた場合の与条件と建築の関係を示しており、例えば「切断やずれの手法を用いることによって、結果的にはファサードの分節化が行われ、小住宅が並ぶこの地域のコンテキストに適応したスケールを持ち得た」(068-1)のように周辺環境に建築の外観を調和させるものや、「中空に浮かんだスタジオの平面形状はル・コルビジェの『ラ・ロッシュ邸』をそのまま転用している」(111-1)のように参照した建築の形状を自らの建築に引用するなど、与条件に建築を合わせるという関係を示す〈適合〉と、それに対して「表現的な色彩がうすく、感情をあらわにしない中性的なオブジェとして、雑駁で混乱した周囲の環境に反語的な力を加える」(129-1)のように建築を周辺環境と対比的に成立させるものなど、与条件に対して建築を対比的・自立的に成立させる〈対立〉という関係形式で全体を捉えた。さらにそれらの形式を同時にもつ〈適合＋対立〉では、建築を景観と同調する外形としながらもある部位では対比させるもの、nLDKなどの既

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

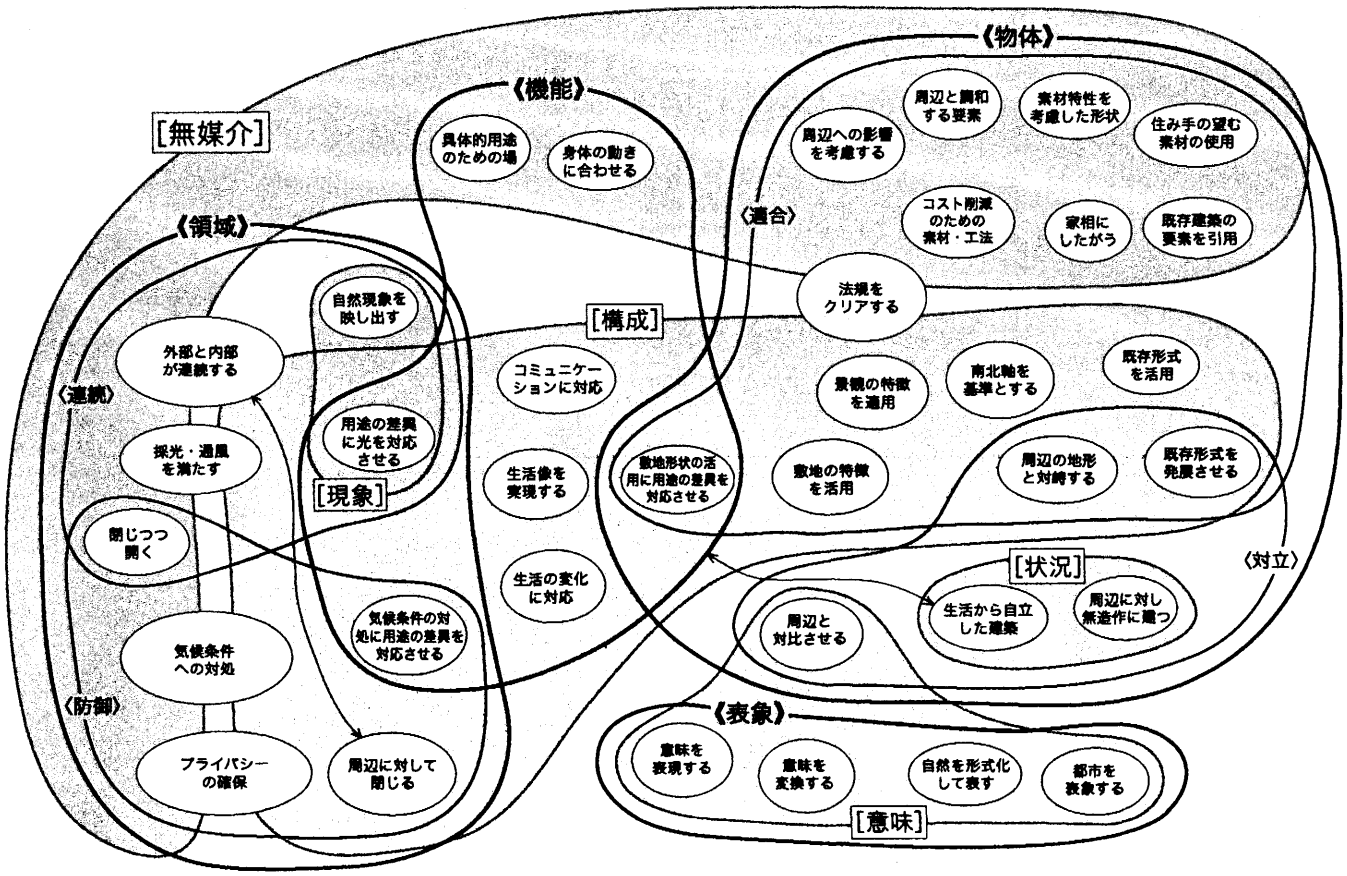


図2　関係イメージの相関図　図2註：各楕円は関係イメージの内容のまとまりを、黒線は〔関係形式〕のまとまりを、灰色部は〔媒介性〕のまとまりを示している。

存形式を批判的に参照しつつ新たに発展させるものがみられた。

3.1.3.《機能》

《機能》は、「住生活の行動を可能にするような拡がりが必要…中心をもつ壺のような中庭を核としてコンクリート造で築き、その周りの拡がり（生活空間）を可変な柔らかい木造で配した」(141-2) のように、建築における具体的用途や生活様式への対応など、居住に関わる使用条件への機能的対応を示す関係形式である。また、「強い傾斜地であるのを利用して標準地盤面を斜面の中央に設定し、それより下部の部分を地下室と算定することにより合法的に居住面積を増やすことにした結果、寝室とその中庭を除くすべての居室は地下にあるという階層配分になった」(007-1) では、敷地の形状に適合するための操作が、同時に用途の違いへも対応しており、この例のような、複数の与条件が１つの建築手法によって満たされる合理的な与条件と建築の関係のあり方は、他にもいくつかみられた。

3.1.4.《表象》

《表象》は、「色彩は分解された平面を強調する単なる記号としてしか機能しない…相互に対立する記号・情報が混在するカオスであり、かつまた無機質でフラットな記号の集積でもある都市、そしてその都市の自己表現としての建築」(066-1) のように、建築家が都市に見いだしたイメージなどを具象化して建築に表現するものや、ある素材を建築に用いることでそれがもつ既存のイメージを変換する、自然界の秩序を建築の外観に表現するなど、与条件に見いだしたイメージや意味などを建築によって表現するという関係形式である。

3.1.5.〔関係形式〕の通時的傾向

関係イメージにみられる〔関係形式〕の４つのカテゴリーや具体的内容を整理したところ、各年代に特徴がみられた（表３・表４）。まず70年代は‘周辺に対して閉じる’が多く、外部に対して閉鎖し、完結した内部空間を求める傾向にある。また、‘生活から自立した建築’、‘意味を変換する’なども多く、様々な与条件に対して建築を準拠させるのではなく、建築を与条件に対して自立した存在として位置づけることで、新たな状況や意味の発生を求める傾向にあるといえる。また、80年代は‘既存形式を活用’、‘景観の特徴を適用’、‘都市を表象する’、‘意味を表現する’などが多く、与条件がもつ特徴的な伝統要素や建築形状を参照したり、それらの表す意味や経験的なイメージを建築に表現する傾向にある。さらに、90年代は‘外部と内部が連続する’が多く、外部に対して開放した建築を求める傾向がみられる。また、‘コスト削減のための素材・工法’、‘コミュニケーションに対応’、‘生活の変化に対応’なども多く、与条件に対する合理的・機能的な建築のあり方が求められている。こうした特徴から1970~1999年の通時的傾向として、与条件と建築の関係のあり方は、防御的なものから連続的なものへ、対立的・表象的なものから機能的なものへと推移している。

3.2.〔媒介性〕：与条件と建築の関係を媒介する概念

これまでみてきた〔関係形式〕が与条件と建築の関係のあり方を示すのに対し、以下では与条件と建築がどのような概念を介して関わるかという観点から、関係イメージにみられる〔媒介性〕を明らかにする。例えば「共通部分の箱は天井高５ｍの吹き抜け…個室がその吹き抜けに直結していることが大切…５人の家族のあるひとりの問題が同時に全５人の家族の問題であろうとするため」(061-2) という例では、家族同士の関係や生活像などの与条件が、建築の構成図

NII-Electronic Library Service

式によって空間化・秩序化されている。つまり、生活に関する与条件が建築の構成操作と関連して認識されていることを読み取ることができる。また、「白ペンキが、建築の材質感をかなり強くうち消してくれる…人間の生と死の両面を、美しく歌い上げる象徴的な色としての役割」(024-1) では、生と死という精神的な事柄の象徴として白という色彩が使用されており、与条件と建築の要素が意味を介して関係していることを読み取ることができる。さらに、「北風を避ける東西に伸びる壁にくり抜かれた開口部からは、円山を望むことができる」(117-3) では、与条件に対応する部分的な操作がみられ、先述のような構成的思考や意味的認識などとは異なり、規範的・技術的な認識に基づいた与条件と建築の直接的な関係が成立している。これらの例は全て与条件に対する認識の尺度の違い、つまり、与条件と建築の関係の媒介となる概念の違いを表しており、このような関係の媒介性を明らかにすることで、建築家の創作にみられる与条件に対する認識の枠組について検討する。以下でその具体的内容をみる。

3.2.1. ［構成］

構成的な思考が与条件と建築の関係の媒介となる［構成］は、例えば「サンルームや外的な空間として自然を内部に取り込む中間領域をつくったりして、自然を内に織り込むような空間構成となっている」(131-1) のように、中間領域を設けることで内部と外部の連続的な関係を築くものや、敷地形状に適応する断面構成を求めるもの、また、先述の例 (061-2) のように構成図式が人間関係や生活像を秩序化するものなどで、これらは与条件の構成的側面に着目することで、与条件と建築を関係づけている。さらに、3.1.3.《機能》で例に挙げた関係イメージ (007-1) は、敷地環境の構成的側面（傾斜）に適応した建築を構想することが同時に人間の行為をも秩序化しており、複数の水準の異なる与条件に対してひとつの構成図式によって対応するという有機的な関係を示す媒介性である。

3.2.2. ［現象］

与条件が引き起こす知覚的な現象が関係の媒介となる［現象］は、例えば「光によってさまざまに変化するブロックの壁の表情が、空間を多様に変質させながら、時の経過を知らせる」(098-1) のように、太陽光を内部の壁に映り込ませて光の状態変化を取り入れる、素材の経年変化を利用するなど、与条件の現象的側面を空間の表現に組み込んでいるもので、これらは与条件と建築が現象的な認識のもとに関係するという媒介性を示している。

以上でみた［構成］と［現象］という媒介性は、いずれも構成的側面・現象的側面という与条件の空間的側面に着目することで建築手法との関わりを求めており、これらの関係イメージは共に空間的な媒介性を示しているといえる。

3.2.3. ［意味］

［構成］や［現象］が空間的な媒介性であるのに対し、［意味］は与条件と建築の意味的な認識による媒介であり、先述の例 (024-1) のように建築の色彩表現が象徴的にはたらくものや「角度がずれた四つ足の架構体とそこを貫通してゆく湾曲した壁…日常的で穏やかな場に、ある程度粗暴なエネルギーさえ感じさせる異なった体系のものを投入するということは、日常性との対比の中で存在して、そしてかつ象徴的機能をもつ非日常的なものの介入ということ」(047-1) のように周辺環境と建築を意味に置き換えて対比させるもの、工業製品などを使用することで素材の持つ意味の転換を図るものなどである。これらは与条件がもつ意味やイメージに着目し、それらと建築の操作の表す意味との関わりの基に建築を思考しており、与条件と建築の関係を意味的認識が媒介している。

表3　関係イメージの分類

関係形式		関係イメージの内容	サンプル番号	年代 70-79	80-89	90-99
《領域》	〈連続〉	外部と内部が連続する	004-1, 007-4, 010-4, 026-2, 037-1, 065-1, 082-1, 085-1, 086-2, 097-1, 098-2, 099-1, 106-1, 114-2, 116-1, 117-3, 118-1, 128-1, 130-1, 131-1, 138-1, 138-2, 145-3	5	4	14
		自然現象を映し出す	027-1, 027-2, 028-3, 032-3, 052-3, 055-1, 065-2, 089-1, 098-1, 109-2, 127-1	4	4	3
		採光・通風を満たす	006-1, 012-1, 025-2, 044-2, 078-3*, 105-1, 115-2, 118-2, 124-2, 131-2, 139-4	4	1	6
	〈防御〉	閉じつつ開く	087-1*, 129-2*, 133-3*	0	1	2
		プライバシーの確保	016-1*, 025-1, 032-2, 070-2, 099-2, 101-1*, 128-2, 129-3*, 130-2*, 140-3	3	1	6
		気候条件への対処	004-3, 019-2, 077-1, 090-2*, 091-1, 117-1*, 130-3	2	3	2
		周辺に対して閉じる	007-2, 008-1, 026-1, 031-1, 038-1, 039-1, 044-1, 052-1, 078-2, 109-1, 113-1*, 145-1	7	2	3
《物体》	〈適合〉	既存形式を活用	001-1, 001-2, 033-1, 073-1, 087-2, 092-1, 093-1, 095-2*, 136-1	3	5	1
		景観の特徴を適用	052-4, 052-5, 068-1, 095-1	0	4	0
		法規をクリアする	010-1*, 050-1, 078-4, 133-2	1	3	0
		南北軸を基準とする	018-1, 141-1	1	0	1
		敷地の特徴を活用	004-2, 036-1, 040-1*, 108-1, 129-4	3	0	2
		家相にしたがう	057-2, 130-5	0	1	1
		既存建築の要素を引用	057-4, 069-1, 111-1, 122-1, 128-3	0	2	3
		住み手の望む素材の使用	053-1, 059-1, 079-2	0	3	0
		素材特性を考慮した形状	134-2	0	0	1
		周辺と調和する要素	032-1, 052-2, 102-1	1	1	1
		周辺への影響を考慮する	034-1*, 107-1, 140-2*	1	0	2
		コスト削減のための素材・工法	043-1, 103-1, 124-1, 124-3, 126-2, 132-1, 135-2	1	0	6
	〈対立〉	既存形式を発展させる	002-1, 046-1, 062-1*, 119-1*, 120-1	2	1	2
		周囲の地形と対峙する	077-2, 086-1, 100-1*	0	2	1
		周辺と対比させる	023-1, 047-1, 060-1, 063-1, 070-1, 129-1, 134-3	2	3	2
		生活から自立した建築	003-1*, 003-2 005-2, 008-2, 011-1, 013-1, 015-1, 020-1*, 028-1*, 029-2, 031-2*, 072-1, 143-1*	11	1	1
		周辺に対し無造作に建つ	010-2, 022-1, 074-1, 092-2	2	2	0
《機能》		コミュニケーションに対応	006-2, 035-1, 041-1*, 061-2, 105-2, 110-1, 117-2, 118-3, 121-1, 124-4, 125-1*, 135-1*, 139-2*, 144-3*, 144-6,	3	1	11
		生活像を実現する	051-1*, 079-1, 083-1, 115-1, 126-1, 139-3, 140-1, 141-2, 144-1	0	3	6
		生活の変化に対応	005-1, 010-3*, 016-2, 025-3, 067-1, 075-1, 100-2*, 107-2*, 121-2, 125-2, 131-3, 134-1, 142-1, 144-2, 144-5	4	2	9
		敷地形状の活用に用途の差異を対応させる	007-1*, 055-2*, 058-1*, 061-1*, 101-2*	1	3	1
		気候条件の対処に用途の差異を対応させる	078-1*, 090-1*	0	2	0
		用途の差異に光を対応させる	014-1*, 079-3*, 133-4*, 137-1*	1	1	2
		具体的用途のための場	057-1, 084-1, 114-1, 133-1, 139-1, 144-4, 145-2	0	2	5
		身体の動きに合わせる	007-3, 060-2, 123-1, 130-4	1	1	2
《表象》		都市を表象する	021-1, 028-2, 034-2, 059-2, 059-3, 064-1, 066-1, 094-1*, 096-1	3	6	0
		自然を形式化して表す	019-3, 049-1, 054-1, 081-1, 104-1, 112-1	1	3	2
		意味を表現する	017-1, 024-1, 030-1, 045-1, 048-1, 071-1, 076-1, 080-1, 088-1, 120-2	4	5	1
		意味を変換する	009-1, 015-2, 019-1, 029-1, 042-1, 056-1, 057-3	5	2	0

表3註：サンプルの数字は関係イメージの通し番号である。* 印は与条件が複数みられた関係イメージを示している。各項目の数字は年代毎のサンプル数を、灰色部は特徴がみられたものを表している。

表4　〔関係形式〕と〔媒介性〕

関係イメージ ＼ 年代	〔関係形式〕《領域》〈連続〉	《領域》〈防御〉	《物体》〈適合〉	《物体》〈対立〉	《機能》	《表象》	〔媒介性〕［構成］	［現象］	［意味］	［状況］	［無媒介］
70-79	14	12	14	17	10	13	33	5	15	11	13
80-89	11	9	24	9	15	16	33	5	19	3	15
90-99	28	13	23	6	35	3	54	5	5	1	37
70-99	53	34	61	32	60	32	120	15	39	15	65

表4註：各項目の数字はサンプル数を、灰色部は特徴がみられるものを示している。

NII-Electronic Library Service

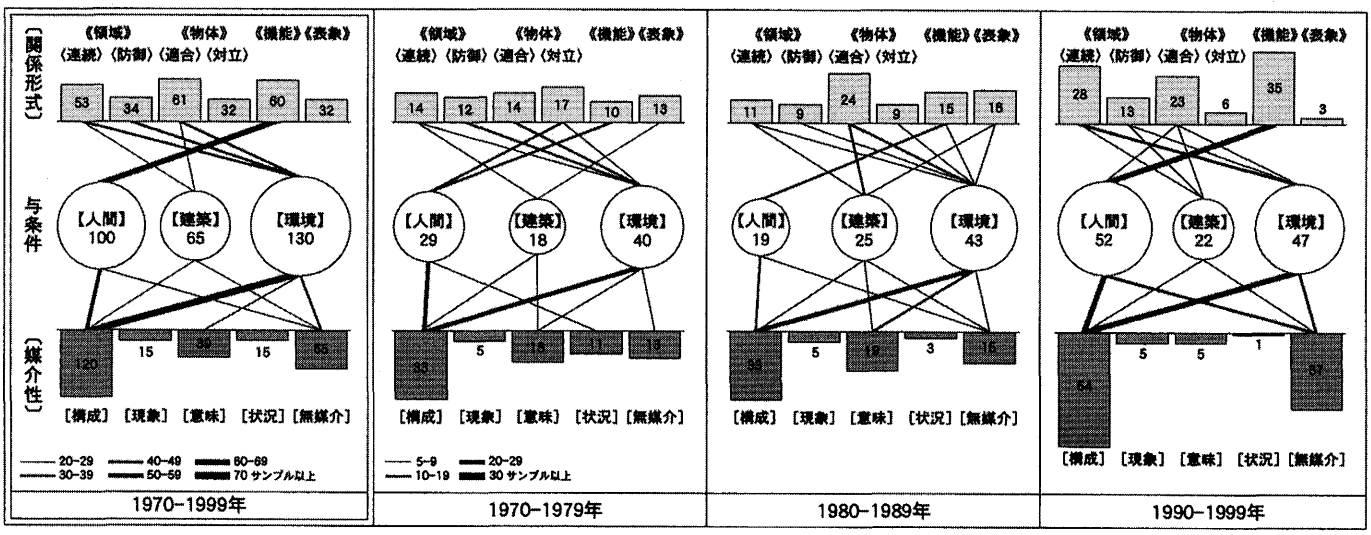


図3　与条件の内容と〔関係形式〕〔媒介性〕の対応関係　図3註：図形の大きさは各カテゴリーのサンプル数の大小を表し、線の太さは結びつきの強さを表す。

3.2.4. ［状況］

例えば「基本的な設計の要素は正方形の平面、シンメトリカルな構成、白い壁などである…機能を固有の形態の中にぶち込むことにより、そこに起因する形態と機能との葛藤の結果が建築の強さの表現ともなりうる」(013-1) や、「街並みに対しては単純な輪郭として、ポンと置かれている…内的に決定づけている建築的構成や記憶の構造が、無性格な環境の中に、ヌッと出現し、前面に浮上してきたように思える」(092-2) などの例は、建築と与条件を互いに無関係なものとして衝突させ、そこに建築家の意図する状況の発生を求めている。このような、与条件との関連性を積極的に回避した抽象的な建築が生み出す状況に表現の可能性を見いだす媒介性を、ここでは［状況］と定義している。［状況］は［構成］［現象］という空間的媒介や［意味］という意味的媒介と相対的に成立する、修辞的性格の強い媒介性といえる。

3.2.5. ［無媒介］

［無媒介］は、これまでみてきた媒介性に対し、例えば「ローコストであることは計画成立のための必須条件であり、仕上げ材としてガルバリウム鋼板、プラスターボード、シナベニヤの3種類を採用した」(126-2) のように、経済性などの規範や技術的側面を基準に形態や素材を決定するもの、既存の建築や周辺要素を外観の構成要素として引用するものなどは、与条件に対する建築的な認識を介すことなく、直接的に建築の部分的操作が決定されている。このような与条件と建築の関係の媒介性を［無媒介］と定義している。

3.2.6. 〔媒介性〕の通時的傾向

関係イメージにおける〔媒介性〕の通時的傾向をみると（表4）、まず［構成］は全体の約5割を占め、各年代を通じて多くみられる。［現象］が［構成］に比べて少数であることからも、［構成］は与条件と建築の関係において基本となる空間的な媒介性であるといえ、多くの建築家が創作において与条件に構成的側面を見いだし、その認識に基づいて建築との関係を構想している。次に各年代の特徴をみると、［状況］が70年代に、［意味］が70,80年代にそれぞれ特徴がみられ、それに対して90年代は［構成］と［無媒介］が特に多く、与条件の認識の尺度を表す〔媒介性〕は、意味的・状況的なものから、構成的あるいは無媒介的なものへと集中する傾向にある。

4. 結

4.1. 与条件と関係イメージの対応関係

本章では、2章で得られた与条件の3つの分類（【人間】【建築】【環境】）と、3章で得られた関係イメージの〔関係形式〕〔媒介性〕との対応関係を図に表し（図3）、建築家の構想する関係イメージについて与条件の内容と共に考察し、結論とする。

まず、与条件の内容と〔関係形式〕の対応関係に着目する。資料全体（1970~1999年）では【人間】と《機能》の組合せが最も多く、人間の生活に関わる条件に対して機能的な建築を構想するという、最も基本的な与条件と建築の関係のあり方を示している。また【環境】には《領域》や《物体》－〈適合〉などとの組合せがみられ、外部環境に対して建築家は様々な関係のあり方を示す傾向にある。さらに各年代の特徴をみると、70年代は【人間】が《機能》と《物体》－〈対立〉の両方と結びついており、生活条件に即した機能的な建築のあり方を求める一方で、それとは対極的に、生活から自立した存在としての建築を構想しているといえる。80年代は【建築】と《物体》－〈適合〉の組合せに特徴がみられ、既存建築の伝統要素や構成形式を参照した建築を構想する傾向にある。90年代は【人間】の割合が高く、そのほとんどが《機能》と結びついており、具体的・現実的な生活条件と建築との機能的な関係を指向している。また【環境】と《領域》－〈連続〉の組合せも多く、外部環境と連続する開放的な建築を構想する傾向にある。

次に、与条件の内容と〔媒介性〕の対応関係に着目する。まずは資料全体においても各年代をみても、【人間】【環境】と［構成］の組合せが多くみられ、人間と建築、または環境と建築の関係は、主に建築家の空間構成的な思考を介して構想される傾向にあるといえる。また各年代では、70年代の【人間】と［状況］の組合せに特徴がみられ、人間の生活をあえて建築とは無関係なものとして認識することで、そこに発生する状況に建築の表現の可能性を見いだすという、修辞性の強い関係のあり方を示している。さらに70,80年代ともに【建築】【環境】と［意味］の組合せが特徴的で、建築物や都市、自然景観などの与条件に見いだした意味やイメージを媒介とし、それを建築の表す意味と対応させるという関係を示している。90年代には、70,80年代に特徴としてみられた意味的・状況的な媒介性は減少し、【人間】【環境】と［構成］［無媒介］の組合せが多くを占

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

める。つまり、人間の生活や外部の環境などの与条件と実体としての建築を結びつける概念は、建築家の空間構成的な思考によるもの、もしくはそのような思考を介さない直接的・部分的なもののいずれかに限定される傾向にあるといえる。

4.2. まとめ

本論では、建築の創作における諸条件や建築家の主題・関心の対象である与条件と実体としての建築の関係について、建築家の言説を資料として分析検討し、それらの関係のあり方や関係の媒介となる概念について考察を進めた。

まず、創作において建築との関係が表現される与条件を、その内容から【人間】【建築】【環境】の３つのまとまりで捉え、それらの通時的傾向をみた。その結果、建築の与条件としては主に生活や自然などが多く扱われることや、各年代における特徴的な与条件を明らかにした。次に、建築家が創作において構想する与条件と建築の関係である関係イメージについてKJ法に基づいて分析検討し、その全体を〔関係形式〕と〔媒介性〕という異なる２つの水準で捉えた。与条件と建築の関係のあり方を示す〔関係形式〕は《領域》《物体》《機能》《表象》の４つの大枠といくつかのカテゴリーで、関係の媒介となる概念を示す〔媒介性〕は［構成］［現象］［意味］［状況］［無媒介］という５つのカテゴリーでそれぞれ捉えることができた。さらにそれらの通時的傾向として、〔関係形式〕においては、防御から連続、対立・表象から機能へと関係のあり方が推移していることが、また〔媒介性〕においては、意味的・状況的なものは減少し、構成的あるいは無媒介的なものへと類型化する傾向にあることがそれぞれ明らかになった。最後に、与条件の内容と関係イメージの対応関係をみたところ、【環境】に対しては領域的・物体的な関係のあり方を求め、【人間】に対しては機能的な関係のあり方を求める傾向にあること、さらに、様々な与条件と建築の関係は主に構成的認識のもとに構想される傾向にあることなどが明らかになった。

以上、本論でみられた建築家の言説にみられる与条件と建築の関係イメージの総体的・相対的まとまりは、本論文の範囲ではあるが、現代日本住宅の創作における与条件の認識に関する空間的な概念や思考のひろがりを示すものであり、そこでみられた通時的傾向は、今後の建築家の創作活動に新たな知見を示すものであると考える。

参考文献

1) 小林陽一、奥山信一、谷川大輔：住宅作品の解説文にみられる環境要素、日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2、pp.557~560、2002
2) 松田丈治、山田深：現代日本住宅における＜生活＞の空間表現、日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2、pp.575~578、2002

注

注1)「与条件」という用語は一般的に、建築の設計において対応を求められる気候環境や敷地状況、法規、建主の要求、予算などの諸条件を指す。本論ではそのような意味に、建築家の主題・関心のもとに参照される事柄も加え、創作において具体的な建築手法との関連性が表現される諸事象を建築の「与条件」として定義し、分析対象としている。

注2) 本論では、設計行為を通じて自らの主題・関心を実体化し、さらにメディアを通して自らの作品に関する著述を広く発表することで表現活動を行っている人々を建築家とし、その作品発表の際に著された作品に関する言説を研究対象としている。

注3) 本論での分析および検討内容は、佐々木夕介、山田深：建築の創作における与条件、日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2、pp.241~244、2003をもとに加筆、再編したものである。

注4) 研究の資料として、現代日本における代表的な建築誌である『新建築』および『新建築 住宅特集』に掲載された住宅作品の「作品解説」を扱う。『新建築』は1925年の創刊以降、終戦後の１年の休刊を除いて現在まで継続して発行されており、また『新建築』の季刊誌であった『新建築 住宅特集』も同様に、1986年の月刊化以降現在まで継続して発行されている。現代日本の建築作品ならびに建築家の論考を広く長期的・継続的に資料として記録する両誌の性質は、多数の建築家の言説を通じて与条件の認識の枠組を求める本研究の資料として適当と判断した。また範囲としては、建築家による「作品解説」及びそれに相当する論考（ほぼ全ての掲載作品に付された文章量の少ない「解説文」や、インタビュー形式の作品解説は除く）が1970年以降に頻繁に掲載され始めたことから、1970~1999年までの30年間とした。この範囲において関係イメージの明確な記述がみられる作品解説は、1970~79年は47、1980~89年は73、1990~99年は245みられ、各年代の資料数に偏りがみられることから、1970~79年の資料数を基準として1980~89年と1990~99年のそれぞれの資料に対して無作為抽出（系統抽出）を行い、1980~89年：49、1990~99年：49の作品解説を抽出し研究対象とした（1970~1999年：145作品解説）。こうした資料に限定しているので、本研究で現代日本建築家の創作における関係イメージを全て把握できたとは思えないが、同種の試みは少ないことからも、今後の研究の展開の手がかりを提案するという点での意義は十分あると筆者らは考えている。

注5) 資料とした145の作品解説において、関係イメージが明確に記述された箇所を分析のサンプルとして抽出し、番号をつけた。番号の前の数字は資料とした各作品解説の通し番号（表１資料リスト参照）、後の数字はひとつの作品解説内での各サンプルの通し番号を示している。

注6) 資料とした作品解説の中に、内容の異なる複数の関係イメージがみられた場合は、それぞれを個別の関係イメージとして抽出している。また、１つの関係イメージの中に、内容の異なる与条件が複数みられた場合は、それぞれを個別の与条件として抽出している。

注7) 本論での括弧記号の使用分類は以下の通りである。

【　】：与条件の分類１
“　”：与条件の分類２
〔　〕：関係イメージの分類
‘　’：関係イメージの内容
《　》：関係形式の分類１
〈　〉：関係形式の分類２
［　］：媒介性の分類
「　」：抽出サンプル中の語句・文章

注8) KJ法とは民族地理学の分野で川喜田二郎氏によって考案された分析方法であり、何らかの問題提起から状況把握、それに対する解決方法の実施検証のプロセスまでの一連の方法をいう。本論では、ある問題を巡って関係のありそうな情報を集め、定性的データとして意味の分かるような全体像とするまでのプロセスを狭義のKJ法としている。（川喜田二郎：発想法、中央公論社、1967）

注9) 本論では1970~1979年を「70年代」、1980~1989年を「80年代」、1990~1999年を「90年代」と表記している。

（2005年12月28日原稿受理，2006年７月６日採用決定）

NII-Electronic Library Service